

報告

入学直後の看護大学生における看護に対するとらえ方

小野 淳二・二重作 清子・古庄 夏香・能登 裕子・永田 華千代

純真学園大学 保健医療学部 看護学科

Understanding of Freshmen on Nursing Profession in Nursing University

Junji Ono, Kiyoko Futaesaku

Natsuka Furusho, Hiroko Noto, Hanachiyo Nagata

Department of Nursing, Faculty of Health Sciences, JUNSHIN GAKUEN University

要旨： 本研究では、入学直後の看護大学生の看護のとらえ方を調査するため、初回講義時に質問票調査を実施した。101名（97％）の回答から抽出した466のデータをカテゴリー化し、以下の傾向が明らかになった。1)【看護師の業務】と【看護師の資質】には71.5％が含まれており、これは看護業務として目につきやすいADLや医療行為の実施場面がイメージしやすかったこと、および入学時から職業の持つ責任の重さなどを強く認識できている可能性がある。2)【チームにおける連携】には7.3％のみが含まれており、チーム医療を意識した教育環境により早期に各学生の役割が見えてくると期待される。3)【看護の対象】の割合については、他カテゴリーに比べ低かった。精神的ケアの面における看護の役割は、授業や実習を通して学んで行くことで具体的なイメージをつかんでいくものであると予想される。

キーワード： 看護大学生、看護基礎教育、とらえ方、入学直後、チーム医療

Abstract: We conducted an investigation at an initial lecture to determine the recognition of nursing university student who had just started at this school. After categorizing 466 areas, data was extrapolated from the answer of 101 people (97%), and the following tendencies were indicated: 1) 71.5% are included in [duties of the nurse] and [nature of the nurse], and this may be because they see the enforcement scene of an experience based on the ADL assistance and the medical act, and they can strongly recognize the importance of the occupational responsibility to have since entering this school. 2) Only 7.3% are included in [cooperation in the team], and it is expected by education environment being aware of team approach in medical care when we can see the role of each student early. 3) The ratio of [subject of the nursing] is lower than other categories. The role of nursing in the aspect of the mental care is expected when we can clearly see by learning through classes and training by learning through classes and training.

Key words: Nursing student, Freshmen in nursing university, Nursing basic education, Recognition of Nursing, Just after entrance, Team medical

緒言

基礎看護学概論は、看護学生が会う最初の看護領域の専門科目であり、看護学の共通項を学ぶ基礎看護学のうちで最も基本になる科目である。この科目で重要なことは、看護学生が看護とは何かという問いに向き合い、看護の魅力を感じ、様々な領域の看護学を学び続けていくための力を育むことである。しかしながら、看護を目指して入学した学生の入学動機は多様であり、自ら看護職を選択した学生もいれば、家族からの勧め

であったりする。また、入学したものの、看護に対するイメージと自分の思い描いたイメージとのズレに悩んだり、やむなく進路変更する学生もいる。看護教員の責務は、入学した各学生がそれぞれに持つ看護への漠然としたイメージを、意識して見つめなおすための機会を設定し、4年間の看護基礎教育を通して、『漠然としたイメージ』から『具体的で科学的な考え、思い』への育みを促すことであると考えられる。

相原ら（2004）は、入学当初の看護大学生が持

つ看護へのイメージについて、入学後1ヶ月経過し、看護学概論他、数科目を履修中である看護大学生を対象に、調査し、報告している¹⁾。そこでは、看護へのイメージが授業の進行に伴って具体的なとらえ方に変化すること、生活の質の回復にも着目し、看護の対象の立場から意味を考える傾向があること、精神的な援助についての関心は高い一方、援助方法について漠然としていることなどが報告されている。他には、学生の『病院』『患者』『看護婦』『看護』のイメージの変化を1年次と卒業時点で比較した研究²⁾、学生の看護認知の変化を入学から卒業までを比較した研究³⁾では、学生の4年間の変化の傾向は明らかになっていた。

入学直後の看護大学生の看護に対する捉え方を明らかにすることは、今後学生が看護の対象をイメージする力に合わせた効果的な教育方法を検討する一助となると考える。

以上のことから、本研究は、入学直後の看護大学生の看護に対する捉え方をまとめ、明らかにすることを目的とする。

1. 方法

1.1 研究対象

A大学(4年制)の看護学科1年次生104名。

1.2 研究方法

1) 質問紙の作成

学生が、現段階における看護全般に関する自己のとらえ方をありのままに表現できるように、「現時点で私が考える看護」の1項目のみに関する自由記述形式のA4サイズの質問紙を研究者が作成した。

2) データ収集方法

看護学概論の初回授業時、授業終了10分前に質問紙を配布し、思いつくままを自由に記述してもらった。時間切れにより講義時間内に記載が終了しなかった場合は、当日中に研究者の元へ持参するように依頼した。

3) データ分析方法

分析方法は、学生が自由に記述した内容を2人の研究者が熟読し、データとして意味を持って書かれている単語、文節を抽出し、そのデータで意味が共通していると2人が共通して認識したもの

ををグループ化して命名し、サブカテゴリとした。さらに、意味が共通していると2人が共通して認識したもののサブカテゴリをグループ化して命名し、カテゴリとした。

研究対象者には質問紙によって得られた結果は研究目的で使用する、授業の評価点には一切影響しないことおよび質問紙の分析終了後は速やかにシュレッダーで処分し、個人情報保護に努めることを質問紙の配布時に口頭で説明し、質問紙の提出をもって研究協力の同意を得たものと判断した。本研究では、入学直後でまだ大学の授業に慣れていない学生を対象としているため、今回は提出義務を課すレポートではなく、任意提出の質問紙であるという区別を明確にして説明を行った。

また、当研究は純真学園大学生命倫理審査委員会の承認を得て行った。

2. 結果

有効回答は101(97%)であった。抽出したデータ数は466であり【看護師の業務】【看護師の資質】【チームにおける連携】【看護の対象】【看護師のイメージ】【志望動機】に分類された(表1)。

【看護師の業務】：看護師の業務に関するものでデータ数は213(45.7%)であった。『身体面のケア』『精神面のケア』『医療行為の実施』『看護教育』『健康の維持・増進』『苦痛の緩和』『疾病の予防』『終末期のケア』より構成された。【看護師の資質】：看護師の資質に関するものでデータ数は120(25.8%)であった。『知識・技術の修得』『コミュニケーション能力』『責任感』『患者の尊重』『生命を尊ぶこと』『判断能力』『ボランティア精神』『看護師像』より構成された。【チームにおける連携】：他職種者やチーム内連携に関するものでデータ数は34(7.3%)であった。『他職種者とのチームワーク』『看護師間の連携』『医師との連携』『地域との連携』より構成された。【看護の対象】：看護の対象に関するものでデータ数は36(7.7%)であった。『人間関係の構築』『信頼関係』『患者の理解』『相手を受容すること』より構成された。【看護師のイメージ】：看護師のイメージに関するものでデータ数は51(10.9%)で

表1 看護に対するとらえ方・看護職の志望動機 (n = 466)

カテゴリー	サブカテゴリー	データ数	データ数(%)
看護師の業務	身体面のケア	91	213 (45.7%)
	精神面のケア	91	
	医療行為の実施	15	
	看護教育	1	
	健康の維持・増進	3	
	苦痛の緩和	4	
	疾病の予防	6	
終末期のケア	2		
看護師の資質	知識・技術の習得	30	120 (25.8%)
	コミュニケーション能力	20	
	責任感	23	
	患者の尊重	20	
	生命を尊ぶこと	4	
	判断能力	10	
	ボランティア精神	1	
チームにおける連携	他職種者とのチームワーク	12	34 (7.3%)
	看護師間の連携	2	
	医師との連携	17	
	地域との連携	3	
看護の対象	人間関係の構築	8	36 (7.7%)
	信頼関係	12	
	患者の理解	3	
	相手を受容すること	13	
看護師のイメージ	肯定的なイメージ	27	51 (10.9%)
	否定的なイメージ	23	
	看護師不足	1	
志望動機	自己の病気の体験	3	12 (2.6%)
	身近な人の病気	2	
	身近な人が医療職	4	
	看護師へのあこがれ	1	
	医療の学習希求	1	
	他者からの勧め	1	

あった。『肯定的なイメージ』『否定的なイメージ』『看護師不足』より構成された。【志望動機】: 自身の看護職への志望動機に関するものでデータ数は12 (2.6%) であった。『自己の病気の体験』『身近な人の病気』『身近な人が医療職』『看護師へのあこがれ』『医療の学習希求』『他者からの勧め』より構成された。

3. 考察

入学直後の学生は、看護を【看護師の業務】【看護師の資質】【看護師のイメージ】【看護の対象】【チームにおける連携】としてとらえていた。【看護師の業務】カテゴリーに属するデータは、半数近くを占めていたが、やはり清潔の援助、排泄の援助、食事の援助といった日常生活での具体的な援助は、自らも行っている活動であることからケ

アの内容を具体的に想像できたと考えられる。また、注射などの『医療行為の実施』を看護の役割として認識している学生は、『身体面・精神面のケア』に比べれば少なかったものの、疾病予防や苦痛の緩和に比べれば多く認識していることがうかがえた。やはり、『医療行為』は看護師の活動として学生が一般的に医療現場において目にする機会が多いため、一つの看護師の役割であることがとらえやすいと考えられる。次に【看護師の資質】のサブカテゴリーとしては、『知識・技術の習得』『コミュニケーション能力』『責任感』『患者の尊重』『生命を尊ぶこと』『判断能力』『ボランティア精神』『看護師像』といった内容が含まれている。このカテゴリーも、全データの25%を占めることから、看護を学ぼうとする学生が、すでに看護職イメージとして、責任の重さ、看護師となった後も知識・技術の習得を続けていくことの必要性、コミュニケーションの重要性を強く認識できている可能性がある。しかしながら、学生が看護を志した背景は様々であり、例えば単に『コミュニケーション能力』といっても、人見知りせず会話が進められるレベルから、言語的、非言語的技術を駆使して、患者のニーズを引き出すことができるレベルまで、個々の認識は様々であると予想される。それを、看護職としてふさわしい、専門職が備えておくべきレベルまで高めることが教育者の務めである。

次に、【看護の対象】のカテゴリーについては、サブカテゴリーとして『人間関係の構築』『信頼関係』『患者の理解』『相手を受容すること』を含むが、全体の7.7%であった。しかし授業開始から約1か月を経過した時点で調査を行っている相原らによる報告では、看護の役割として、身体的な観察よりもむしろ精神的な観察について述べている学生が多いことが報告されている¹⁾。これは、例えば看護技術実施時の、患者の表情の観察や声掛けの必要性など、精神面に配慮した看護の役割は、授業における学びを通して認識が強くなっていく可能性を示唆している。【チームにおける連携】に関しては、入学前よりチーム医療における看護の役割に関して学んできている学生もおり、率としては全体の7.3%と高くはないが、例えば臨床検査技師、診療放射線技師、臨床工学技士な

ど、他学科との合同授業などが可能な看護師養成機関においては、よりスムーズに具体的なイメージが形作られていくものと思われる。

最後に、看護に対する【志望動機】の категорияは、今回の調査における「看護のとらえ方を明らかにする」という目的には直接的な関わりのない category であるが、各人の「看護のとらえ方」が【志望動機】につながっていくものと考えられるため、関連情報として示した。この category においては多くが自己の体験や身近な人の存在を看護師への志望動機として挙げていた。

4. 結論

- 1) 【看護師の業務】【看護師の資質】 category で全データの 71.5% を占める。注射などの医療行為や日常生活動作の援助については看護師の業務の中でも目につきやすく、看護の役割としてイメージしやすかったものと考えられる。また、看護を学ぼうとする学生が、すでに看護のイメージとして、責任の重さ、大学卒業後も継続して知識・技術の習得に努めることの必要性、コミュニケーションの重要性を強く認識できている可能性がある。
- 2) 【チーム医療】の category については、データの 7.3% を占め、現在はイメージがつきにくいものと思われる。
- 3) 【看護の対象】の category については、データの約 7.7% を占め、人間関係の構築、精神的ケアの必要性に関する認識が他の category に比べ低かった。

謝辞：本研究にご協力くださいました学生の皆様に厚く御礼申し上げます。

本研究の一部は、平成 23 年度第 31 回日本看護科学学会学術集会にて発表した。

【参考文献】

- 1) 相原ひろみ, 酒井淳子他, 看護系大学生の看護に関する認識の変化—第一報入学初期における学生の看護に関するとのらえ方—, 愛媛県立医療技術大学紀要 1 (1), 73-79, 2004.
- 2) 渡邊裕美, 杉山敏子他, 看護学生の卒業時における「病院」「患者」「看護婦」「看護」のイメージの変化—一年次と比較して—, 東北大学医療技術短期大学紀要, 5 (2), 141-148, 1996.
- 3) 山内葉月, 看護意識の啓発に関する研究第 4 報—短大看護学生の看護認知の変化, 入学から卒業まで—, 熊本大学医療技術短期大学部紀要, 7, 1-10, 1997.
- 4) 白神佐知子, 栗本一美, 土井英子他, 看護学生の卒業期における看護概念の認識構造と今後の課題—平成年カリキュラムにおける学習効果としての分析—, 新見公立短期大学紀要, 20, 63-75, 1999.
- 5) 立石有紀, 岩本真紀他, 看護学生の看護観の形成過程—看護学概説, 看護理論の科目前後における看護観の変化から—, 香川医科大学看護学雑誌, 6 (1), 63-67, 2002.
- 6) 小野淳二, 二重作清子他, 入学直後の看護大学生の看護に対するとのらえ方, 日本看護科学学会学術集会講演集, 31, 485, 2011.